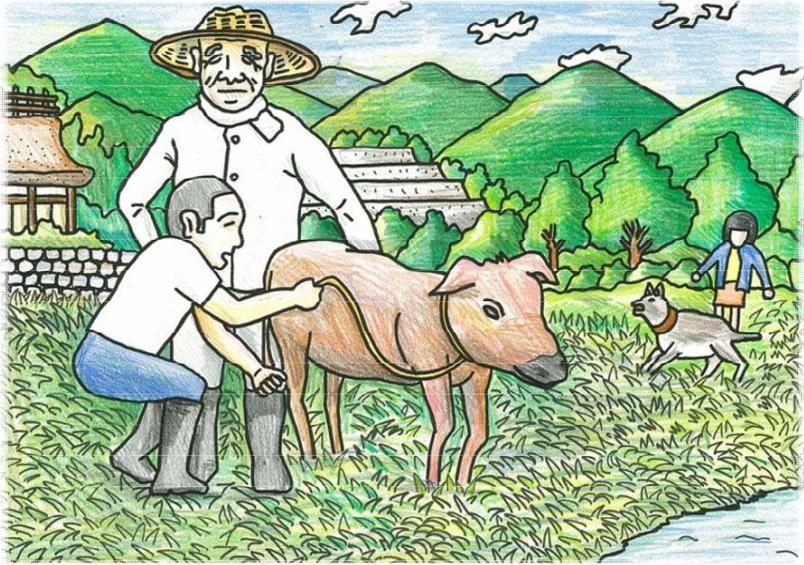


子牛のはなし

花岡大学  
作

前田晃宏  
絵



しんぺい君のうちの牛が、子牛をうみました。

子じかのように、びんびんはねまわって、

とてもかわいい子牛でした。

しんぺい君と、おじいさんは、大よろこびで、ひまさえあれば、

子牛の顔をのぞきに行つて、いろいろとせわをしてやりました。

それで、子牛のほうも、二人の顔をおぼえて、

小さな頭をすりよせてよろこびました。

おじいさんは、「ほんとに、おまえはかわいいやつじゃのう。」

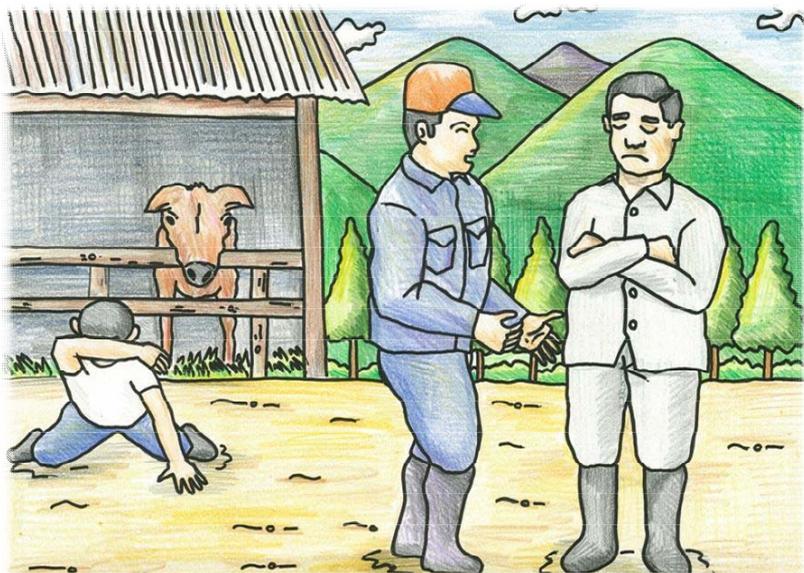
と、言つて、その首を、だきよせました。

しんぺい君も、まげずに、

「ほんとに、おまえはかわいいやつじゃのう。」と、言つて、

その首にとびついて、自分の方へ引っぱりました。

子牛は、日に日に、大きくなりました。



ある朝のこと、牛飼いのおじさんがやってきました。

お父さんと、長い間話していましたが、

やがて、子牛を売ることに、きまったとのことでした。

それを聞くと、しんぺい君は、

「ううたら、いやだ、いやだ。」と、だだをこねましたが、

だれもあいてにしてくれません。

おじいさんは、山の麦畑へ行つて、るすでした。

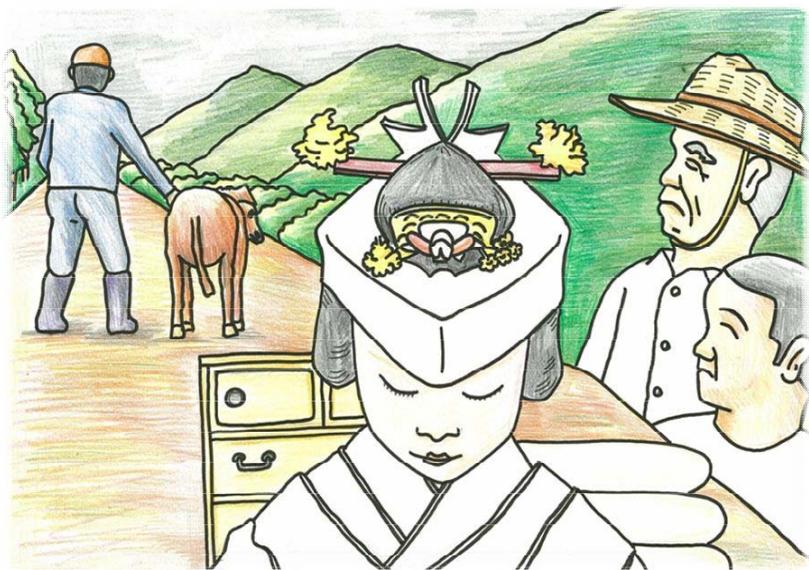
おじいさんなら、きつと、

売らなくてもいいようにしてくれるにちがいないと、

思いました。

しんぺい君は、急いで山道をかけのぼって、

おじいさんに知らせました。



だが、おじいさんは、少しもびっくりしないでいました。

「あれを売らないことには、シヨねえちゃんの、

およめ入りの道具を、かつてやるおかねがないのじゃ。

さびしかろうが、しんぼうしてやつてくれよ。のう、しんぱい。」

しんぱい君は、ゴクツと、つばをのみこみました。

山の上から、村がひと目に見えます。

ふと気がつくと、しんぱい君のおうちのよこの、土橋を

子牛がつれられていくところでした。

それを見ると、しんぱい君の目は、

たちまち、なみだでいっぱいになりました。

ふたりは、じつとつ立って、見えなくなるまで、

子牛を見送ってやりました。



見えなくなると、おじいさんは、

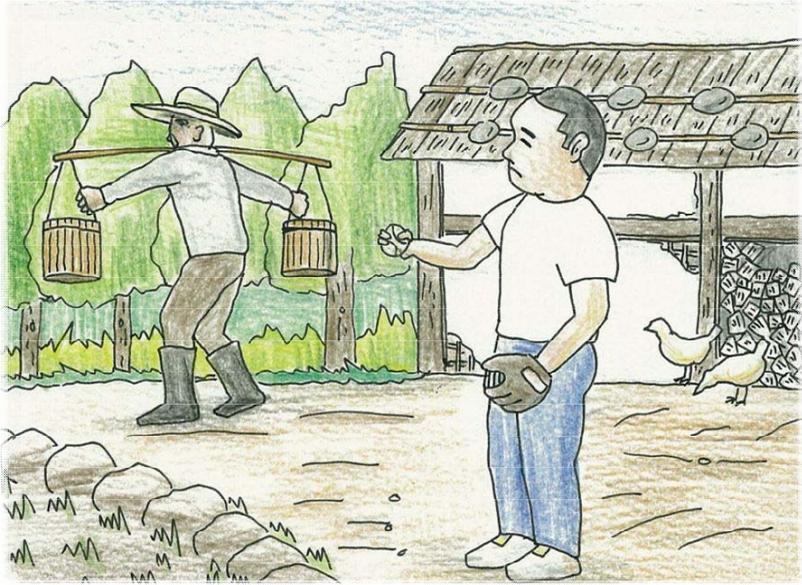
「男の子は、いつまでも、めそめそするもんでやない。

きつぱりあきらめるんだ。」と、言いました。

しんぺい君は、

「うん。」と、うなずいて、

わらってみせました。



その日から、今日まで、しんぺい君とおじいさんは、

子牛のことについて、いっぺんも、話したことがありません。

きっぱりあきらめたからです。

しかし、しんぺい君は、

本当は、あの子牛が売られていった先を、

こっそりとさがしていたのです。

そのねがいが、今日かなえられました。

ひと月ぶりで、牛飼のおじいさんに会い、

行き先はとなり村の新八さんの家だと、

教えてもらいました。



それがわかると、もう、じっとしてられません。

すぐ、となり村まで走っていきましました。

新八さんの家は、じき分かりました。

出てきた男の子は、だまつて、

うらの牛小屋へ、つれて行ってくれました。

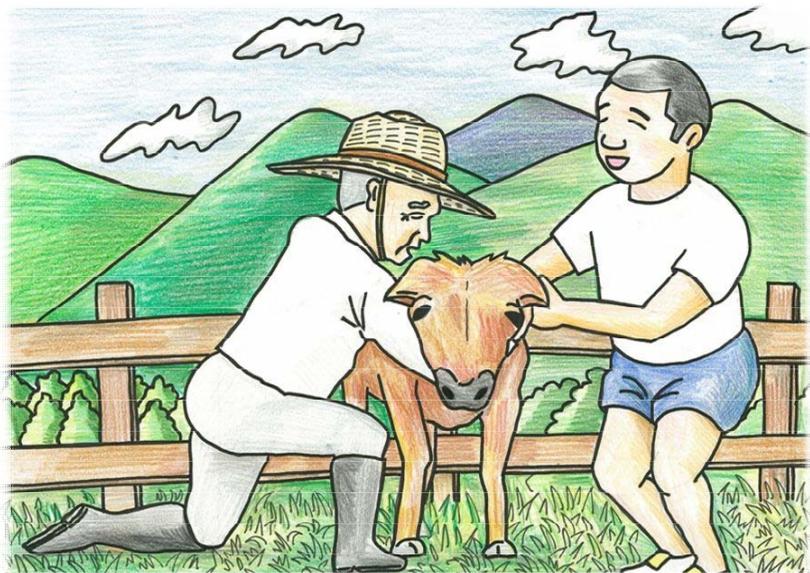
しんぺい君のむねは、ときどきし、

おじいさんもつれてくればよかったと、後かいました。

ところが、牛小屋まで来たとき、しんぺい君は、

「あー」

と、おどろきました。



おじさんが、ちゃんと先に来ていて、

うれしそうに、子牛の首をだいていたからです。

あきらめたような、顔をしていたくせに、やっぱり、

おじさんも、今日、牛飼いのおじさんに聞いて、

こっそりやってきたのにちがいません。

しんぺい君は、すっかりうれしくなって、

「こら、おじさんは、ずるいぞ。」と、言うなり、

子牛の首にとびついて、自分の方へ引っ張りよせました。

おじさんも、わらいながら、引っばりかえました。

子牛は、おじさんと、しんぺい君とに、

引っばり合いされながら、大きな、黒い目を見はって、

とてもうれしそうに見えました。